

東京工科大学で「パワハラ抗議自殺」

有名学長に疎まれた大学教員が再雇用を撤回され、研究室内で首吊り自殺。大学側は労基署に届けず籍口令。

東京・八王子市の東京工科大学の軽部征夫学長（75）は東京大学先端科学技術研究センター教授などを歴任した著名な学者である。人の遺伝子配列を調べるゲノムチップの研究、ワインやパンの酵母菌を使つた有毒物質検出センサーの開発などの業績で知られ、立花隆や筒井康隆と対談するなど、一時はバイオ分野の花形教授だった。

東京・八王子の東京工科大学キャンパスと軽部征夫学長



だが、他方では、東大先端研究時代に、大学院生名義の通帳に架空の研究費を振り込ませていたとして「サンデー毎日」で批判されたこともある。

その高名な軽部氏が学長を務める東京工科大学で、教員の自殺事件が起きていたことが本誌の調べでわかつた。いつたん大学が再雇用を決定した教員が、その後、上司の学部長から解雇を通告された挙句、大学内の自分の個室で自殺していたのだ。

関係者によると、教員は軽部学長から「徹底的に嫌われていた」とい、大学内では、軽部氏が何らかのかたちで解任に関与した可能性が指摘されている。

反対意見を言う人を排除

ア学部特任講師の山下太郎氏

（仮名）。山下氏は2012年10月に就職指導教員として、3年契約で雇用された。

「仕事に熱心で、教員や学生から信頼されていた。大学には就職担当講師のための個室兼学生との相談室があり、山下氏は連泊まり込むことも珍しくなかつた」（大学関係者）

ところがこの山下氏を、軽部氏はなぜか毛嫌いしていたという。「肌が合わないのか、会議で山下氏が話し始めると軽部氏が『もういいよ』と発言を制止したこともあるた」とは別の関係者の証言だ。亡くなる1年ほど前にも、こんな出来事があった。山下氏が大学のキヤリアサポートセンター改革に関する提案書を提出したところ、軽部氏

は「チラツと見ただけで提案書をポイッと放り投げた」というのである。

「軽部氏は頭の回転が速く、自分に自信があるせいか、反対意見を言う人は排除しようとする。人的好き嫌いも激しい。一方の山下氏は人情を好む熱血漢で直言型でした。水と油の関係だったのかもしれません」（関係者）

14年10月、大学の人事委員会で山下氏の再雇用が審査された。結果は「高得点の評価」（関係者）で、18年9月までの3年間の任期延長が承認された。

さらに同年11月には、当時の最高議決機関の大学評議会（注。山下氏の死後に理事長に決定権が移された）に山下氏の再雇用が諮られ、こちらでも承認を受けた。こうして山下氏の再雇用は、正式に決定されたのだった。



ところが、それ

が覆された。

関係者の話を総合すると、評議会の決定の2カ月後の15年1月、当時のメディア学部長が突然「3年延長の契約はなくなつた」と山下氏に伝えたという。

いつたん決めた雇用関係を一方的に破棄することは法律に抵触している疑いが濃厚だった。このため、周囲は「労働基準監督署に相談すべきだ」と山下氏に助言した。これを受け、山下氏が学部長に「労基署に行く」と伝えたところ、学部長の態度は豹変。同年4月、学部長は「ずっと大学にいていい」と再雇用を再び約束した。

ところがその2カ月後の15年6月12日、学部長は再び山下氏に「やはり再雇用しない」と通告した。山下氏と学部長は激しい口論になつたといふ。

その日の夜、山下氏は、大学内での研究室から妻と同僚に電話をして「解雇される」と話した後、遺書を残して研究室内で首を吊つた。

大学関係者によると、学部長は、山下氏に「任期を延長する」と、期間中にあなたは65歳の定年を超える。だから再雇用できない」と繰り返した。

しかし、それを承知で大学評議会は山下氏の任期延長を決定したのです。しかも、同時に雇用延長が決まつた別の就職担

当の講師も任期延長中に65歳を超えるが、こちらは再雇用された。定年云々は山下氏を辞めさせること実に過ぎません」

山下氏の仕事ぶりをつぶさに見てきた、別の大学関係者はこう話す。「当時、学長の判断で就職担当講師を3人雇っていた。就職担当を3人置くことで学生、父兄に『就職に熱心な大学』とアピールしたかった。しかし講師とは名ばかりで3人の雇用は不安定でした。それぞれ週2回

3日の勤務で、フルタイムの教員ではなかつた。収入は少なく、生活は苦しかつたと聞いている。低いのはメディア学部の特性が原因。山下氏の責任ではない。ところが山下氏は就職に関する会議の席で、よく軽部氏に叱責されていました。解雇を伝えたのは学部長だが、恐らく学長の意を受けた行動だろう」（同前）

労基署報告は「必要ない」

軽部氏は学園都市八王子で「大学コンソーシアム八王子」の会長も務め、いわば地元教育界の名士。地元行政にも顔が利く。だが気に入らない教員については、山下氏以外でも「何であいつを採用した。だれが推薦したのか」と周囲によく文句を言っていたらしい。「職員が精神的に追い込まれて退職したこともある」と語る関係者もいる。

大学関係者が語る。

「山下氏は死をもつて抗議した。大学側は死の真相を究明すべきだつたのに頗るむりした」

「これでは憤死した山下氏が浮かばれない。」

氏の自殺は「学内で箱口令が敷かれ、葬儀の日取りはおろか、訃報も流さなかつた」。労働安

全衛生規則の定めでは、労働者が就業中や事業所内などで死亡したときは管轄の労働基準監督署に報告する必要があるが、それが「行われなかつた」という。

山下氏の妻は「仕事のことはわからない」として取材を拒否。軽部学長と大学に文書で質問書を出したところ、同大の山田宏治事務局長名で「雇用延長候補者として承認した」のは事実だが、決定の「権限は別の機関」にあるとして、延長決定と無効通告の事実を否定。また労基署には「必要はない」と判断し報告しなかつたと回答した。

大学関係者が語る。

「山下氏は死をもつて抗議した。大学側は死の真相を究明すべきだつたのに頗るむりした」

「これでは憤死した山下氏が浮かばれない。」

■筆者紹介 長谷川学 ジャーナリスト。
刊現代」記者などを経てフリーライター。